

Title	ナチス的人間像について
Author(s)	中川, 與之助
Citation	經濟論叢 (1942), 55(4): 392-406
Issue Date	1942-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131722
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷五十五第

月十年七十和昭

論叢

乘數理論の問題……………

文學博士 高田保馬

ナチス的人間像について……………

經濟學士 中川與之助

伊太利勞働體制の特徴……………

經濟學士 大塚一朗

資本形成の過程……………

經濟學士 中谷實

時論

大東亞日本の確立と大家おほやの論理……………

經濟學博士 石川興二

研究

近世絹織業の生産構造……………

經濟學士 堀江英一

佛領印度支那の關稅問題……………

經濟學士 河野健二

說苑

國家經濟會と大島貞益……………

經濟學博士 本庄榮治郎

附錄

彙報

ナチス的人間像について

中川與之助

はし が き

總ての國民に於てその國民の理念たる人間像 (Menschbild) は異つてゐる。譬へば日本の人間像が英吉利的人間像とはいふまでもなく獨逸的人間像との間にも少なからぬ相違がある。人間像は獨り國によりてのみならず同一の國民によりても時代によりて亦異なる相を呈する。かくて古代の人間像と中世の人間像と近世の人間像が相異なるものをもつことは何れの國民に於ても同様である。理念としての人間像は言ふ迄もなくその國その時代に於ける人間の典型であり人間形成の原理となるものである。それはその國その時代の要請によりて生まれ、人々の中に生きた力となりてその時代を創造してゆく。かゝる人間像の問題は時代の轉換期に於て最も明白に人の意識に上つてくる。所謂時代の轉換期とは舊時代から新時代への推移の行はるゝ時であり、政治も經濟も文化も總て舊きものを清算し新しきものを建設せんとする時である。かやうな時期に常にあらはるゝ現象は新しき人間型の出現して來ることである。新しき人間型は舊人間型と全く異なるものであり、それだけに舊時代の人々をして目を瞠らしむるものがある。時代の轉換期は舊き人間像がその一般性を失ふ時であり、新舊人間像の相剋摩擦の免れえざる時である。勿論新しきことのみを以て新時代を擔ふ人間とはなし難いが、理念としての新時代の人間像は舊

きものと同一に非るは言ふまでもなく、正に舊きそれを克服せんとするものである。蓋し如何に時代が政治・經濟・文化等の體制の變革を要求しても、それを現實に擔ふ人間精神が變革さるゝに非れば到底生きた體制となりえざるが故である。洵に新しき時代は新しき人間像を要求するし、新しき人間像は新しき時代を要求し之を創造してゆく。今日、新しき時代の新しき人間像を正しく把握してそれにふさはしき人間を創り出すことこそ日・獨・伊等世界の新秩序を目指す諸國にとりて最も根本的な問題でなければならぬ。

ナチス獨逸に於ては新しき人間型(neuen Menschentyp)新しき獨逸人(neue Deutschen)新しき人間像(neue Menschenbild)が盛んに論ぜられてゐる。ナチス革命は彼等ナチスの言ふ如く世界觀(Weltanschauung)人生觀(Lebensanschauung)の革命である。詳言すれば西歐的個人主義的的人生觀や猶太的唯物主義的世界觀を根本的に變革して民族的世界觀(völkische Weltanschauung)によりて獨逸國家を再建しようとするのである。従つて舊時代の精神を新しきものに改鑄すると共に舊時代の精神に即應して建設せられてゐた政治・經濟・社會・文化の諸體制を根本的に變革しなければならぬ。即ち精神も肉體も生活も共に他民族的なものを拂拭してゲルマン的なものに返らねばならぬのである。ナチスがナチス革命を成就せんとして新しき世界像、新しき社會像を論ずると共に新しき人間像を問題とすることは當然といはねばならぬ。蓋し彼等もいふ如く、新しき世界觀をもつナチスの人間像が生々として獨逸人の中に躍動するときにナチス革命も成效するが、かゝる人間像が獨逸人にとりて何等生きた力となりえない場合にはそれは到底成就しないからである。ナチスが政治・經濟・社會等の諸政策の一切の根底に新しき世界觀の普及、精神の改造、再教育(Umschulung)を置いてゐるのはかゝる理由による。吾人はこれよりナチス人間像を明にせんとするのであるが、そのために一應舊時代の人間像を回顧しなければならぬ。

一 舊時代の人間像

舊時代は個人主義の時代であり殊にナチス革命以前はその個人主義を地盤としてマルキシズムの跋扈せる時代である。周知の如く個人主義或は自由主義は遠く第十三世末から起れる文藝復興にその端を發し、それは西歐に於て人々が教權と政權とから、即ち宗教的な拘束と封建的權力の壓迫とから解放されんがために唱ひ出されたものである。従つて自由主義・個人主義はその本質に於て反國家的・反宗教的であり、人間の權利・個人の自由をその固き信條となし、信仰を斥けて理性的・合理的・批判的ならんことを要求する。吾人は以下に個人主義的なかゝる人間像を更に分説するであらう。イ、個人的人間像は所謂「個人」(Individuum)としての人間に絶對的價值を認める。即ち何人と雖もこの個人を犠牲にするをえない。國家も社會もこの個人たる人間の利益・幸福のために存するのであり、何らそれ自體獨自の存在價值を有するものではない。かやうな個人至上主義の理論が國家・社會は個人の集合よりなるとなす所謂社會的原子論 (soziale Atomismus) をとれることも、従つて又國家や社會を個人の利益の爲の契約によりて成立するとなす所謂國家契約説を生むに至れることも當然であらねばならぬ。ロ、個人的人間像は個人の自由平等をその固き信條となす。「人は出世及び生存に於て自由及び平等の權利を有す」(人権宣言 第一條)而してその自由及び平等の權利は「人の天賦且つ不可讓の權利」であるとせらるゝ。かやうな自由・平等を信條とする人間に於ては、何人と雖も自己にとりての自由なる生活を営みうべく、それは「他の者を害せざる凡てを爲し得」、「各人の自然的權利の行使は社會の他の各員をして同一の權利を享有せしむることの外に制限を有せない」(同上宣言 第四條)のである。かくて個人主義社會に於ては萬人は各々自己の生活の爲に他と自由に競争すべく

ホツプスの所謂「萬人の萬人に對する鬭爭」(bellum omnium contra omnes)を以て人間の自然的權利に基つく自然的狀態なりとせらるゝに至つた。かゝる自由鬭爭の社會に於ては人々は自己の幸福の爲には最も計慮深く立ち廻はらねばならぬ。即ち彼の行動は最も合理的 (rational) でなければならぬ。詳言すれば投する犠牲少くして獲得すること大なる所謂經濟主義こそかれらの行動の原則である。かくて又個人主義的人間は自ら經濟人 (economic man) となり、經濟人たるものが個人主義的社會に於ける典型的人間なるが如くに至つた。自由主義は利益交換の社會となり、そこでは人々は人道心 (Humanity) に訴へずして、他人の自愛心 (Self-love) 利己心 (Self-interest) に訴ふべきなりとせらる。へ、個人的人間像は知理的・批判的である。それは信仰や傳統の權威を認めない。従つて又それは自ら現實的・物質的ならざるをえぬ。知理的・批判的であり現實的・物質的であるといふことは個人の幸福・利益を旨とするものであることはいふまでもない。彼等にとりては個人的な現實的・物質的利益に非るものは總て非合理的であり非理知である。唯合理的なもののみが眞の實在であり價值である。現世を離れた彼岸や目に見えざる神を説くことは觀念的であり非合理的であり浪漫的であるとせられた。かくて個人主義的人間は傳統をすて去り神と絶縁し人間の理知を最高の祭壇に上せた。人間の魂は内に向けられずして只管外へ／＼とのびて行き否魂はその根元を失つて外的なものに際限なく引摺り廻はされることゝなつた。いふまでもなくそれは精神の物質化に外ならない。＝、個人主義時代の間像は世界的・國際的である。蓋し個人主義は「個人」としての「人間」を考へるのであるが、その場合の個人は總ての人間に共通する要素のみによりて構成せられたる、といふよりも寧ろ「個人」とは豫め「人間の權利」とか「人間の平等」とかいふが如き共通の要素を前提し若くは附託して構成せられたる抽象的・一般的概念である。かゝる個人としての人間の概念よりみれば何れの國民も人間であり個人であつ

て何等相異があるべきでない。かくして人は總て又「世界人」であり「國際人」である。即ち人間は世界的に平等であり世界はかやうな平等な人間の集合であるとせらるゝに至つた。人々が自己をかやうな人間、かやうな個人と思惟する以上、そして世界をかくの如きものとして觀念する以上、その生活も自ら世界的・國際的になり、彼等の生活には國境なく何ら國家的・民族的制約をうくべきに非ずとせらるゝに至つた。近代的個人主義の人間には祖國・民族・傳統は失はれ、彼等はコスモポリタンとしてインターナショナルマンとして只管自己の私利私福を漁り求めるものに墮落するに至つた。ホ、舊人間像は希臘型であつた。既に述べし如く近代的人間解放の原理は文藝復興運動として、又その運動の中に於て發展するに至つたのであるが、その文藝復興運動が伊太利を先驅として起されたといふ點に於て、且又、古代希臘文化が極めて卓越してゐた點に於てそれが自ら「古の希臘に返れ」の運動となつていつたことは周知の如くである。文藝復興運動は古代希臘文化の復興であり、希臘の人間の再興運動である。換言すれば希臘の人間・希臘の文化を模型として新しき歐洲文化を復興することである。かくて新しき個人主義の人間像は具體的には希臘の人間像の再現であり模倣とならざるをえなかつた。洵に近代人にとりては希臘の思惟・希臘の美・希臘の實踐こそ憧憬的であつた。個人主義の人間像が世界の人間像として具體的には希臘のなものを求めていつたといふことは、實際的には自己の國民性・民族性を放棄してゆくことに外ならなかつた。希臘的になることが進歩であり、解放であり、非希臘的なるものを多く遺す程封建的・中世的なりと考へられたのである。そして近代人に描がれた古代の希臘人は具體的には理知的・合理的であり自由であり均衡的調和的であり且つ南方人的な暢達・明朗をもつものとせられた。近代人がかゝるものを典型的人間像として只管これに近つかんとするに至つたのである。

以上の如き個人主義的人間は獨逸に於てマルキシズムの影響をうけるや、殊に第一次戦争の後に於ては著しく唯物的・階級的・鬭争的となるに至つた。蓋しマルキシズムは唯物主義によりて世界を一元的な物質現象とみて總て精神的なるものゝ存在を否定し、普通に精神的なものとせらるゝものも要するに物質運動であり、それは社會的物質關係の「翻譯」であり反映に過ぎずとなした。かゝる物質至上觀は人々の魂をして物質の前に全く脅えさせ只管物質を畏怖し人間の解放は物質の力の外になしと信ぜしむるに至つた上に、更にマルキシズムはかゝる物質の生産力は資本主義の下では既に行詰つてゐるが、それは生産機構が資本金階級によりて獨占せられてゐるからなりとなし、この生産力の行詰りを打破するには唯無産プロレタリア階級の資本金階級に對する階級鬭争の外なしと教へたからである。かゝる歪曲された唯物的な非國家的な階級的理論は到底許されざる破壊的なものなるが、世界戦争に敗れ更にそれに引續いて聯合國殊に英・米・佛から重壓を加へられて生活機構を全く破壊され飢餓線上を彷徨するの外なくなつて自暴自棄となつてゐた獨逸國民を煽動するには充分な效力をもつてゐたのである。今や獨逸國民は個人主義的・自由主義的・民主主義なるのみならず益々プロレタリア的即ち唯物的・階級的・革命的・鬭争的となり、舊き傳統や文化を破壊し、信仰や精神的なものを冷笑し、勞働を嫌惡輕蔑し經濟社會は愈々混亂衰頹してゆくにもかゝらず、歴史はまさに自然の一部分をなし自然と同じ法則に従ふものであり、人間の意志・意識及び意圖と無關係なりとして拱手傍觀するまでに精神を化石化せしむるに至つた。個人主義自由主義・マルキシズムは徹底的に獨逸魂を蝕喰んでしまつたのである。これらの思想的「毒素」をとりのけるに非れば獨逸民族は滅亡するの外なかつたであらう。

(註) ゾンバルトはマルタスの社會進化論に據れば、「歴史は人間がどうもしないのに進行する、それはむしろ背後に自然

力に推されつつかれて動かされる。歴史は將に自然の一部分をなし従つて又自然と同じ法則に従ふのである。自主的に決定する力としての自由意志はかくの如き歴史觀からは排除される。」「マルクスは社會運動を自然史的過程として觀察する、この過程を導く法則は人間の意志・意識及び意圖に無關係であつて寧ろ逆にそれが意志と意識とを決定する」のであるとなしてゐる。

一九三三年ナチス政權の樹立と共に嵐の如き革命が始つた。舊き個人主義やマルキシズムがナチスによりてあらゆる憎惡と憤怒を以て掃蕩され出した。そして一方に於て舊時代の文化が破壊されると共に他方に於ては新しき民族共同體 (Volksgemeinschaft) の理念と共に新國家の建設が始つた。舊き人間像は葬り去られて新しきナチス的人間像が擡頭するに至つた。抑も民族共同體の理論はナチスの世界觀から生れた。ナチスによれば世界史は決して個人主義者のいふ如く個人の闘争史でもなく、又マルクスの教へし如き階級と階級との闘争でもなく實に民族 (Volk) と民族との闘争史なのである。ナチスはいふ。元來人類生活の基本單位を個人であるとか階級であるとかなすのは誤謬であつてそれは民族である。即ち人類は民族として生きてゐるのであり、民族は最も根元的な自然的生活單位 (Lebensinheit) である。従つて民族を離れては人類は生存してゆけない。民族生活 (Volkleben) をなすことは自然的なるのみならず必然的宿命的である。民族は自然共同體 (Naturgemeinschaft) 宿命共同體 (Schicksalsgemeinschaft) である。されば總ての人間は民族の人間であり總ての人間生活は民族的生活であり、民族はかゝる人間によりて營まるゝ一大生活共同體である。人々はかゝる民族的生活共同體の一員として生活してゆくのであるし、民族としてはあらゆる個即ち肢體 (Glied) を民族的生活體系に編入しなければならぬ。かくの如くにして民族的全體が生きてと共にそれに從屬する個體も亦始めて生きうるのである。³⁷ 人々はナチスによりて建設せられつゝある社會を共同體主義とも全體主義とも名けて個人主人階級主義と之と區別する。吾人は以下にかゝる共同體の又は全體主義的人間像を詳説することとしよう。

2) W. Sombert, Deutscher Sozialismus S. 98. 難波田氏譯 p. 115
3) 拙著 ナチス社會政策の研究、第九章參照

二 新時代の人間像

ナチス革命は「總ての獨逸人の胸に生きた主體、己が本質のまゝに自己を展開し獨逸民族たる全一體の中に自己を實現しようとする主體としての民族」の覺醒である。⁴⁾この大いなる主體が各人の胸中に目覺め各人がこの主體との一體の繋りを自覺したるものを眞の獨逸國民である。ナチス的人間像とは「獨逸人に自覺せらるべき眞の獨逸人の姿であり」、「獨逸人にとりては萬人の胸に生まるべき人間の本質的姿である。」かくてイ、新しき人間像は共同體的・全體적である。民族主義にありては個人主義の説く如き「個人」は存しない。所謂個人は民族的な肢體 (Glieder) であり、それは最初より全體の部分にすぎない。「部分の前に全體がある」(Das Ganze vor dem Teil) のであり個が集計せられて金となるのではない。従つて總ての個は全を擔ひ且つ全に宿命付けられる。實に民族的全體を生かすことによりてのみ個たる各人が生かされうる。されば全體を生かすこと、全體の利益をはかることが民族生活に於ける第一義的要請となり、人々の民族に對する奉仕・犠牲貢獻が道德的格率となる。個人主義的人間は如何にして多くを全體から獲得するかに心を碎いたが全體主義的人間は如何にして多くを全體に捧げんかに心を碎く。前者は自己の利益を中心にして動いた「經濟人」であつたが後者は全體の利益を中心にして動く「政治人」(politische Mensch) である。ロ、新しき人間像は宗教的・信仰的であり精神的である。既に述べし如く前時代の人間は理的・批判的・無信仰的であり、殊にマルキシズムは「人間が宗教をつくり宗教が人間を作るのではない」とし、超自然的であり超人間的なものを一切斥け遂に宗教を「國民の阿片なり」とまで貶した。然しナチスは民族を信じ民族を創り給へし神を信する。不滅(ewig)な獨逸國とゲルマン民族への固き信仰なくしてはナチズムは成立しない。従つてナチスは合理的なものと同時に非合理的なものを認め理的なるものと共に神祕

4) デニルクハイム著、橋本譯、生活と文化、p. 137

的なるものを認め蓋然的なるものと共に奇蹟的なるものを信ずる。彼等は従つて又浪漫的であり形而上學的である。ハ、新しき人間像は民族的感情や本能を高く評價する。個人主義時代は理性を偏重して感情的なものや本能的なものを非合理的なるものとして斥けた。従つて人間の自然的な本能や感情は萎えて人々は冷かな計慮打算をなす合理的人間と化するに至つた。ナチスは理性と共に否寧ろ理性よりも民族的感情や本能こそ民族的生命の自然的發露であり民族的創造・活動の根元的な發條なりと考へる。かれらによれば逞しき民族的の本能や豊かな民族的感情——民族的名譽心・民族的愛・敵愾心等々——がなくなつたときはその民族の滅びる秋である。換言すればかゝる人間的なものの非合理的なものがこそ人間の生命の基礎をなすものである。かの理性の如きも決して本能や感情から切り離されて働くものに非ずして、寧ろそれらものを力として表現せらるゝものである。逞しき本能や豊かな感情なくして偉大なる理性を望むことは不可能である。ナチス民族に於ては冷かな理性の人よりも寧ろ熾烈なる民族的感情に燃え、抑へんとして抑ふ能はざるが如き逞しき民族的の本能を有する人を好ましとなす。二、新しき人間像は實踐的・行動的である。前時代の理性的な所謂合理的人間は計慮的・打算的であり如何にも「經濟人」らしく物事に對しては批判的であつた。彼等は利害損得を計慮して輕舉盲動をなさざるがその反面には極めて逡巡狐疑にして非實踐的であつた。かくの如き自己の利害の打算をのみこれ事とするが如き合理的人間、民族・國家の危急に際しても狐疑逡巡する底の人間をナチスは斥ける。民族・國家の問題に關して強烈なる民族的の本能や感情が燃え上りて沒我的に勇敢に行動し實踐する人こそナチス的人間である。「抑も獨逸人は實踐的・能動的であり、與へられた局面に形成の手を加へることを好み、事物をそのまゝに放任することを好まない。獨逸人は常に積極的な行動に訴へ行動に必要な決斷力と個性的責任の能力をもたない人間を輕蔑する」⁵⁾ ヒトラーも「我々の求むるものは眞理でなくして行動である」といふ。この行動的・實踐的であるといふことと關聯してナチス的人間

が個性的であるといふことを述べなければならぬ。デュルクハイムも「本質の統一性はその生活表現の統一に現はれ、他方之と同時に本質の豊かさはその生活表現の多様性に現はれる。成員の多様性が豊かであればある程、生きた全一體は生活力に富むのである。成員の獨自の生活が濫利たる場合にはそのために全一體の力を危くすることもあらうけれども、他方に於て却つて全一體の力を挑發し強めるのである。これに反して成員の力が弱められ抑壓されるれば總ては全一體の力をも硬化し、或は弛緩するであらう。」となし、且つ個性の強きことを獨逸的な顯著な傳統となしてゐる。^(註二)

(註二)「獨逸は自主獨立的な思想家と實踐家の國である」となし、獨逸に於ては「個性的なものに對する愛好は對人關係に限らず、他のすべての生活を一貫した要素となつてゐる。恐らく獨逸ほど多くの意見が同一の問題に對して聞かるゝ所はあるまい。又、獨逸ほど各個人が自己の生活の場所を個性的に形造つてゐる所はあるまい」といひ、「ローゼンベルグはゲルマン的人間が自己の本質的性格の獨特無比なる點にまた獨特な不滅性を體驗してゐることを指摘し、これを以てゲルマン的・北歐的な魂の深奥なる神祕となしてゐる」といふ。

ホ、新しき人間像は鬭争的である。鬭争的であるといふことは民族的世界觀に對する強固なる信念から生まれる當然の結果である。ナチスは新しき世界觀を信じ獨逸民族を信するが故に、之と相容れざる世界觀に對して、又他民族に對して鬭争をなさざるをえないのである。ナチスによりて不滅の獨逸を建設せんには現に獨逸を破壊し續けた個人主義的世界觀や唯物的の世界觀を克服しなければならぬ。この克服鬭争なくしては獨逸は依然としてこれらの世界觀とそれを奉ずる諸民族の壓迫桎梏から解放さるゝことはないのである。洵に非獨逸的なものに對する鬭争はナチスにとりては死か生か興か亡かの岐るゝ所である。ナチスによれば民族は常に他の民族との生存の鬭争を續けて來たのであり、自己の本質的なものを保持せんにはこの後と雖も鬭争は免れえないのである。

6) デュルクハイム著、橋本譯、生の論理、p. 55
7) デュルクハイム著、前掲獨逸精神、p. 94
8) 同上 p. 91

かるが故に彼等は民族を一に又鬭争共同体(Kampfgemeinschaft)と名ける。民族の本質をかくの如きものとするならば、民族的信念に基づく鬭争こそ民族成員の本質的性格でなければならぬ。「ナチス的人間は鬭争を好むが故に鬭士たるのでなく信念に忠實なるが故に鬭士なのである」⁹⁾そして又、「鬭士たることと信念をもつことは新なる時代を造り出したナチ的な人間の二つの根本的特性である。鬭争を怖れての微温的態度、中途半端な態度、無爲無策の妥協、己が不調和を蔽ひかくす調和的態度これらはすべて非ナチス的として斥けられてゐる。へ、新しき人間像はゲルマンの北方民族的である。このことは個人主義的人間像が希臘的南方民族的なりし點に對して又國際的世界的なりし點に對して特に顯著なる對比をなすものである。ゲルマン的人間たることの根本要件はゲルマンの血を繼ぐことにある。血を同じくするといふこの生物的・種族的條件こそ民族成員たるの紐帶である。かるが故にナチスは民族を血の共同体(Blutgemeinschaft)ともいふ。而して血の共同体たる民族に於ては民族の異るにつれて自ら精神も肉體も異らざるをえぬ。精神や肉體が民族的に條件づけられてゐるといふことは自然的であり、それを否定し若くはそれを均等化・平均化せんとすることは神の定め給へし自然法則に反くものである。ナチスは民族的精神・民族的肉體をその本質に基いて發展せしむることを神の至上命令と考へ、それらを他民族と折衷・融合・妥協せしむることを以て民族を亡すものと考へる。かれらにとりては眞も善も美も民族的なものであつて超民族的・世界的なものではない。かつて獨逸民族が古代の希臘人を憧憬し又世界人・國際人たらんとしたことは全く民族の破壊行爲にすぎなかつたとなされる。而して今やナチスにとりて復興すべきものはゲルマンの眞理・ゲルマンの善ゲルマンの美であり他民族のそれの徒らなる模倣追隨ではない。而してゲルマン的人間の一般的性格としては軍人的であり農民的なりとせらるゝ。軍人と農民とは何れも祖國愛が強く且つ忠實にして機

性心に富むが、特に軍人としては尙武的・鬭争的・英雄的であり責任と名譽を重んじ規律と統一に服従する念が強く、農民としてはその勤勉素朴であり隣人を愛し平和を愛好することがあげられてゐる。出でては勇敢なる兵士となり歸りては素朴なる農民になることがその理想である。總ての人にプロシヤ的軍人魂を植ゑつけ而して農民に非ざる總ての市民をも半農民的ならしめようといふのがナチスの理想である。尙、以上の如きゲルマン的特質がゲルマン人が北方民族であるといふことと密接に結ばれてゐる。ローゼンベルグも「英雄的氣分は有らゆる北方的な民族の根本的典型であるといひ、又第三帝國は北方的人間の不滅の價値を土臺とし深き獨逸魂に基いて建設せらるゝものだといふ。ナチスが北方的民族の特性を發揮することがゲルマン人の使命なりとなしてゐる。」^(註三)

(註三) ローゼンベルグは「歐羅巴の諸國家は總て北方的の人間から築き上げられ、そして維持されて來た。この北方の人間はアルコール・世界大戰及びマルキシズムによりて一部分は分解せしめられ、一部分は除芥された。白人種にして若しも歐羅巴に於て建直しを行ふに非ずんば世界に於けるその地位を保持することがないのは極めて明白である」といひ又「歐羅巴を維持せんが爲めには何よりも先に歐羅巴の北方的な力の源泉が活々となされ強化されねばならぬ。それは外でもない。フィンランド及び英吉利と獨逸スカンデナビヤの一國である」といふ。^(註四)

へ、次に新しき人間像に於ては兩性の極が緊張しなければならぬ。個人主義時代は人間は「個人」として平等であり自由であるとなし、男女の問題に就ても兩性の異なるべき面よりも寧ろ等しき面を捉へて之を強調した。この女性も男性と平等なる個人であり人間であるとなされることは封建的な桎梏を多く受けてゐた女性にとりては將に天來の福音であつたらうが、この自由思想と個人の解放といふ思想が女性の解放を誤れる方向に發展せしむるに至つた。即ち婦人の男子よりの解放及び男女權利の平等といふ要求が之である。殊に獨逸に於て社會民主主義政權の樹立せらるゝや、唯物主義・階級主義の影響をうけてかゝる歪曲せる婦人解放論に油を注ぐの形となつ

11) ローゼンベルグ著、吹田村土譯、二十世紀の神話、p. 103

12) 新獨逸國家大系第一卷、p. 32

13) ローゼンベルグ、前掲書、p. 503

15) この項拙書ナチス社會建設の原理第四章に詳論す

14) 同上 p. 504

た。今や「解放された新しき女」は徒らに戀愛の自由・性愛の自由・離婚の自由を叫びて結婚を嫌忌し、婦人を家政婦や子女の養育者たらしめんとする婦人の天職論は婦人を侮蔑するものなりとまでなし、彼女等は男子と平等の物質的・社會的地位を獲得せんがために勞働戰線・政治戰線・文化戰線に進出して男子と勇敢に争ふに至つた。前時代の女性はかくて全く「男性化」した。ナチスはかくの如き女性觀や婦人解放論を根本的に斥ける。かれによれば男性と女性とは「性的分擔性」を異にしてゐる。而して男女兩性は各々神によりて示されたる性的分擔を正しく遂行するによりて、始めて男女の協力がえられ民族も榮えるのであるが、然らざる場合は民族は亡びるの外ない。女性の最大の使命は母となり子女を教育し家族を護ることにある。母こそは血と種族とかいふ生物的な民族生命の擔ひ手であるのみならず、國民精神の媒介者であり保護者である。之に對して政治とか軍事とか勞働とか生産とか、法典編纂とか哲學體系をつくるとか偉大なる交響樂や戯曲を創作するとかといふ總じて構成的・建築的な仕事は男子に屬する。今までの女性觀の誤謬は「女性のみを見ることにある。女性と男性、劍と精神、民族と國家、權力と文化とを見ないのである。歴史は女性が自己の使命を忘れて男子の仕事たる政治に乗り出した國家、即ち女性國家は悉く滅亡してゐることを示す。ナチスによれば男性が女性化し或は女性が男性化して各々その極(Pol)を失つた時、又社會なり世界なりが墮落崩壊してゆくものとみる。かくてナチスによれば男性は益々男性らしく女性は益々女性らしくならねばならぬ。即ち男性と女性とはその極としてその對立を常に緊張せしめねばならぬのである。

むすび

吾人は以上によりて前時代の人間像より説き起してナチス的人間像に説き及んだ。前時代の人間は所謂「個人」

であり、それは不可侵の天賦人權を有し絶對至高の價值であつた。而して國家も社會も原則としてこの權利を侵害する能はず、否寧ろこの權利を擁護せんが爲に存するものなりとせられた。かゝる個人は自己の利益・幸福の追及を第一となす功利主義者・快樂主義者であり、打算的・計慮的な「經濟人」である。彼は又精神的なるものや信仰的なものを輕んじて飽くまでも現實的批判的となつた。理性によりて論證せらるゝ合理的なるものに非れば實在にあらざる價值に非ずとせられた。更にかゝる個人は一切の國民的・民族的因縁を捨象した一般の人間なるが故におのづから世界人・國際人たらざるをえなかつた。かくてかゝる個人には最早祖國も母國もないのである。

彼は正しくコスモポリタンである。さてかゝる個人主義時代の人間は獨逸に於ては社會民主主義時代に入るに及んで、マルキシズムの影響をうけ、更に一層唯物的となり且つ階級闘争的・國家革命的となつていつた。ナチス革命はかゝる獨逸國家の危機を救はんとしてなされたものである。今や舊き個人主義的世界觀や猶太的・唯物的世界觀に對して新しき獨逸的民族世界觀が掲げられて果敢なる闘争が始つた。この闘争は世界觀の闘争であるだけに、それは人間精神の根本的・全面的變革を意味する。新しきナチス的人間像は舊時代のそれらと全く異なる。

彼は共同體的全體主義的であり「個人」でなくて肢體(Glied)である。彼は又ゲルマン民族を創り給へし神を信じゲルマン民族の優越と不滅を信ずる。彼は宗教的・信仰的・信念的であり、冷かな理性的なるものよりも情熱的な民族的感情に動かされる。彼は徹底的に闘争的であり微溫的・妥協的なるを許さぬ。彼の血にはゲルマンの英雄主義・貴族主義が脈うち彼の胸には名譽と責任觀念が燃ゆる。彼は飽くまでもゲルマン的にして他民族的な眞も美も善も彼を眩惑することを許さない。希臘の文化やアングルサクソンの文化さては猶太的文化に支配されしことをこの上なき不名譽・損失であつたとす。ナチス的人間はいかゞの如く一般に舊時代のそれと異つて來たのみな

らず、之を男性と女性との問題に就てみるも亦大いに異り、機械的・劃一的男女平等觀や男性と女性との階級關係・支配關係等は悉く捨てられて、男女兩性の眞の協力眞の共同體的關係の樹立を目指すに至つた。男は外にそして女は家にいふ日本の傳統思想がナチスに於ても自然的原理として復活しつゝある。今やゲルマンの女性は原則として悉く母たるべく、母として國民精神の媒介者・民族文化の保護者たるべしと要求せらるゝ。ゲルマンの血の淨化とその増殖の必要はいやが上に高く叫ばれつゝある。以上の如く世界觀の變革と共にゲルマン的人間は自己革命を遂げゲルマン的國民的生命は逞しき躍動を始むるに至つた。それは正しくナチス革命の成功であるが、かくの如く革命が成功した所以はナチスが獨逸の國體精神ともいふべき傳統的民族精神をよく把握してそれを以て國民に訴へ以て國民の血を湧かしたによるにと考へられる。さて人々はナチス的人間像をみてその餘りにも日本的なるものに接近しつゝあることに寧ろ驚嘆するであらう。その國家的・愛國的・獻身的・犧牲的であり信念的・信仰的である點に於て、非享樂的・素朴質素・勤勉努力的なる點に於て、更に又、女性が家庭的となるに至れる點に於て、何れも傳統的な日本的なものと同方向なものを見出すのである。もとよりそれには古來の獨逸的なるものゝ、復活せられたるものが多く必ずしも日本的なるものを規準となしたるものではないが、一度個人主義・唯物主義によりてそれら獨逸的なものを棄て去つた獨逸が再びそれを復興するに當りて、進々乎として發展してゆく日本の傳統の中に、多分にこの獨逸的なものを見出すといふことが、如何に大なる示唆を與へ力となつたかは言ふを俟たぬであらう。今や日本的人間像もナチス的人間像もアングロサクソンの又は猶太的人間像の克服の爲に相携へて戦ひつゝあるが、それは人類文化史上かつてなかりし壯觀といはねばならぬ。日本的人間像とナチス的人間像との相異その形而學上の關係等に就ては更に論稿を新にするであらう。(一七・九・二)